資料３

令和 5 年度第 2 回佐久市立中央図書館建替再整備検討委員会資料

アンケートの回答を受けて

1　中央館の役割　について

実情や今後の取り組みについて記した。

(1)　サービス対象

- 市域全体へのサービス
- 周辺地域へのサービス

■　サービス対象地域

中央図書館がサービス対象とするのは、市域全体と旧佐久市域である。

■　旧佐久地域へのサービスについて

旧佐久市は、1961（昭和 36）年、浅間町、東村、野沢町、中込町の 4 町村が合併して誕生した。図書館の開館は、昭和 54（1979）年だが、今まで図書館として各地区に働きかけた記録はない。

合併から 50 年以上経ている今、世代が変わったり、新住民が増えたりしている。旧町村単位である地区意識がどの程度存続しているかは不明だが、アプローチする意義はあるだろう。

各地区にはそれぞれ佐久市公民館が設置されている。HP の登録団体をみると、活発に活動している様子がうかがえる。各公民館を訪問して、図書館に対するニーズを把握する意義があると思われる。

中央公民館（猿久保）	旧浅間町
浅間公民館（岩村田）	旧浅間町
生涯学習センター（取出）	旧野沢町
中込公民館（中込）	旧中込町
東公民館（志賀）	旧東村

(2)　市域全体へのサービスを行っているか？

中央図書館、地域館のサービスが届きづらい地域へのサービス

■　実利用者

ここでは、人口に対する令和 4 年度の実利用者の割合をみた。

本市の図書館登録率は、5 割を超えているが、令和 4 年度の実利用者は、図 1 でみると人口の約 1 割前後である。市全体の平均は 11％であり、地区ごとの平均は 9.7％から 12.1％の範囲にある。登録率に比べて実利用者の割合は低い。

ただし、地区ごとの差は比較的小さい。中込地区と東地区が他地区と比べて若干高いのは、中央図書館・分館に近いところにあるためと考えられる。

図 2 では、地区をさらに地域に分けて利用率をみた。すると差がはっきり見える地域がある。小田井と青沼が目立って低い。どういう理由があるのだろうか。すぐには判明しないが、隣町の図書館との位置、児童数との関係も含めて検証する必要がある。

■　移動図書館「草笛号」

別紙資料 p 1-2 は、移動図書館「草笛号」（以下 BM）のステーションごとの貸出人数（別紙資料　表 1）と貸出冊数（別紙資料　表 2 ）を示したものである。

1 年間の全利用者数は、2,133 人である。ＢＭは年間 15 回巡回するので、単純な平均では令和 4 年度の BM 実利用者数は 142.2 人となる。

年間で一番利用者が多かったステーションは、第 1 コース長土呂の 137 人である。平均すると、1 回に 9 人くらいの利用者があることになる。逆に全ステーション 71 箇所の中には、1 年間全く利用がなかったステーションもある。

なお、保育園や老人介護施設にも巡回しているので、利用者数が少なくても貸出冊数が多い場合もある。

■　全域サービス

佐久市の全域サービスは、分館、地区館、BM によって、ほぼ行われているといってよいだろう。ただし、BM では短時間の駐車で回数も限られる。利用のしやすさという面からは今後検討が必要であろう。また、BM ステーションから遠い人や、健康状態等の理由で自宅から出られない人もいる。このような事情を抱えた人々への配本も検討する必要がある。

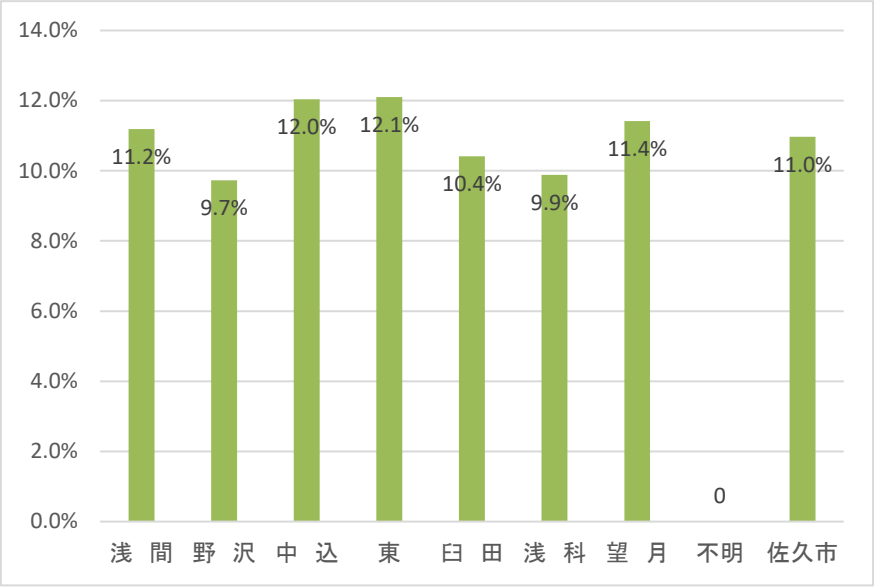

図１　令和４年度　地区別人口に対する実利用者の割合

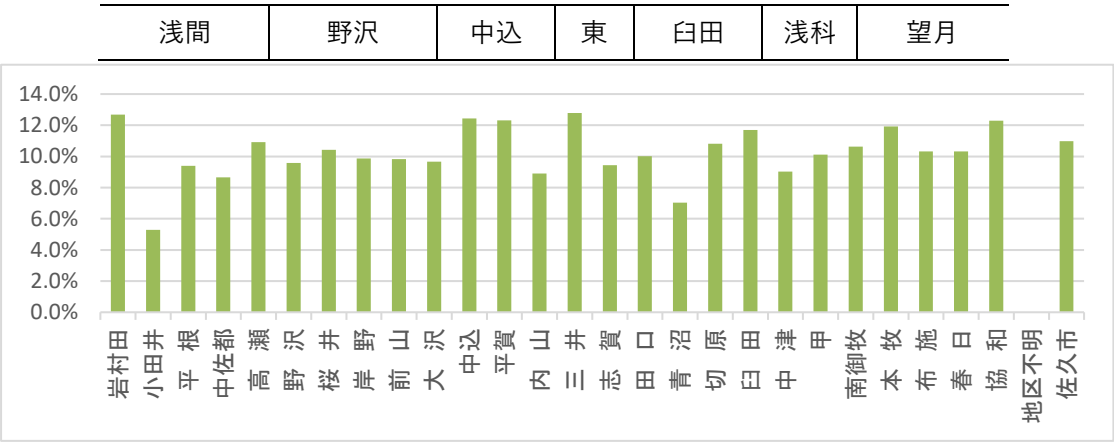

図２　令和４年度　地区別地域別人口に対する実利用者の割合

※　移動図書館「草笛号」については、資料１ p 7.8 をご覧ください。

(3)　図書館網の運営、推進（今後、民間の文庫・ライブラリー等の地域情報サービス・ネットワークが必要）、BM 基地（今後、地域情報サービス・ネットワーク拠点を介した館外サービス全般が必要）

市内に民間の文庫・ライブラリーがあるとは認識できていない。今後、発見したり、設立されたりすることを知ることができれば、あらためてネットワークについて考えていく。

BM が巡回するステーションには保育園、老人介護施設もある。また、各地区にある児童館にはそれぞれの図書館が対応している。中央図書館は、BM による運行。臼田図書館、浅科図書館、望月図書館は、市の公用車を使っての配本である。

いずれも図書の配本であり、情報サービスや担当者間のコミュニケーションは行われていない。今後どのようなことが可能か、検討したい。

(4)　レファレンスサービス（今後、多様な利用目的・利用者層に応えるサービスが必要）

レファレンス件数は、令和 3 年度は 2,938 件で、長野県内 19 市の中では多い方から 7 番目である。（別紙資料 p 5　表 5）

ただ、何をレファレンスとするかは各館の判断にゆだねられており、件数の過多でレファレンスサービスの評価をするのは難しい。実際に本市の場合でも、蔵書数、利用者数が少ない分館や地区館の方が中央館より件数が多い例がある。何をレファレンスとするか、共通認識を持つ必要がある。

もっとも、レファレンスの件数より大事なことは、レファレンスにきちんと対応すること、レファレンスに役立つ資料群・情報を整備すること、レファレンスの結果を記録して今後に活かすことである。

今後は、この観点から、本館のレファレンスサービスのあり方を見直し、多様な利用目的・利用者層に応えられる体制を作っていく必要がある。

レファレンスに役立つ資料群・情報については、地域資料・行政資料の収集を積極的に行うとともに、選書方針・方法の見直しも必要である。

(5)　地域のニーズ・課題を把握する（地域文化の振興、新しい学びの在り方への対応、産業や観光、防災、子育てや高齢者見守り、DX 等、様々な課題）
佐久市内の図書館を活用した学び・人的交流のハブとしての役割

地域のニーズや課題を把握する仕組みはない。

今後、利用者、図書館利用団体、公民館との会話や、庁内部署への「御用聞き」等を通してニーズ・課題の把握に努める。

(6)　幅広いジャンルの蔵書、蔵書コレクション構築

表 1 は、各図書館の資料種別蔵書数である。

図 3 は各図書館の資料種別の冊数を図にした。どの館も資料種のなかでは一般書が多い。また、絵本は、中央館が 2 万冊近い冊数があるが、臼田、浅科、望月も 1 万冊以上所蔵している。

参考資料、郷土資料については、冊数だけでなく、各資料の評価についても検証する必要があるだろう。

図 4 は、資料種別に所蔵館の割合をみたものである。どういう割合が適切か現段階では判断できないが、今後の収集計画の参考にしたい。

分類別の分析は未実施である。また、今後は利用実績との関係の分析も行いたい。

ヤングアダルト向け資料は浅科図書館しか区別していないため、この表には記載していない。

表 1　図書館ごとの資料種別蔵書数　令和 4（2022）年 3 月 31 日現在

資料種	中央	ｻﾝｸﾞﾘﾓ	臼田	浅科	望月	草笛号	全体
一般図書	130,728	17,762	36,672	42,645	33,751	2,481	264,039
参考	3,856	101	704	702	666	0	6,029
郷土	10,372	324	5,682	4,268	2,782	138	23,566
多言語	1,451	0	140	471	0	0	2,062
児童	30,338	4,495	15,975	16,333	15,456	1,187	83,784
紙芝居	2,447	267	1,168	844	481	100	5,307
絵本	19,378	4,858	11,343	12,317	10,010	2,598	60,504
雑誌	4,209	383	1,282	2,144	757	176	8,951
AV資料	1,179	0	1,244	1,900	515	0	4,838
全体	203,958	28,190	74,210	81,624	64,418	6,680	459,080

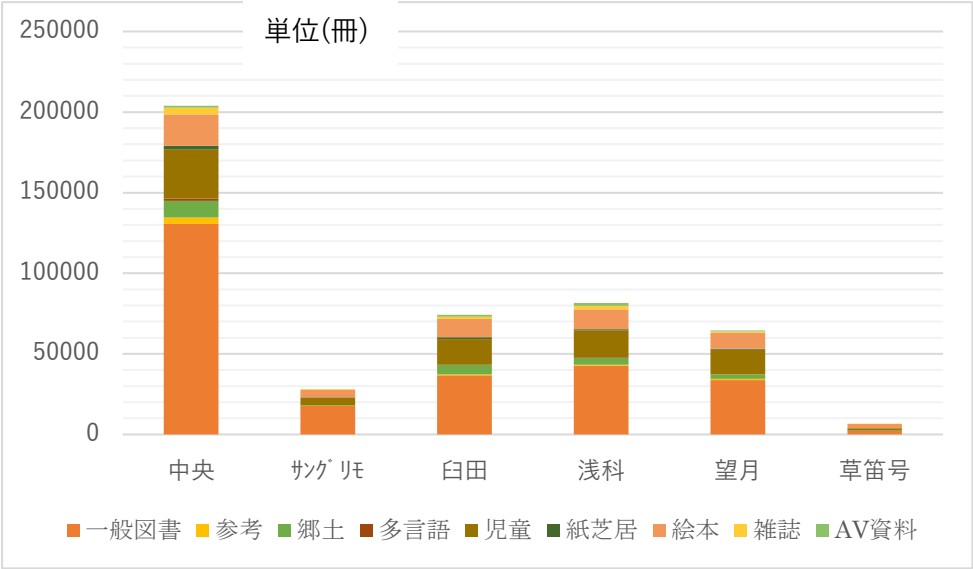

図３　各図書館の資料種別冊数

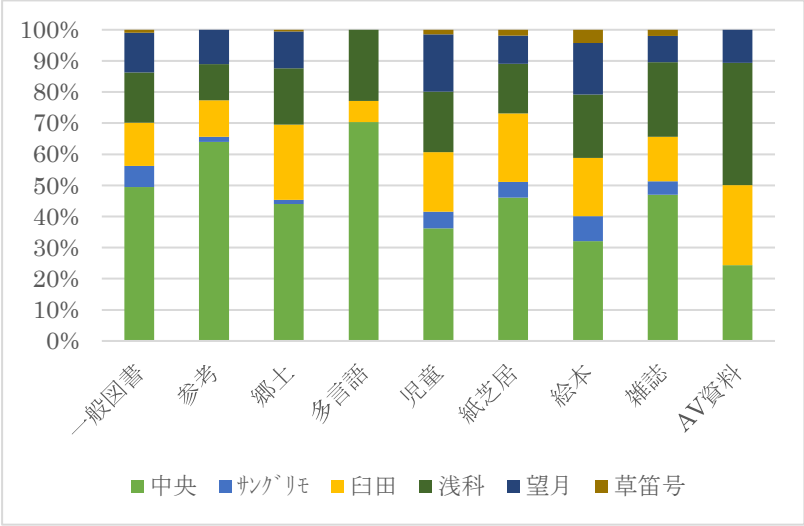

図４　資料種別の所蔵館の割合

(7)　佐久地区ならではの文化や、社会課題解決に資する資料整備・サービス

■　地域資料、博物資料の把握

地域資料や博物資料は、その土地の文化を知る手がかりとして、またアイデンティティを感じる「よすが」として役に立つ。

図書館としては、地域資料を収集・保存・提供するとともに、資料の形をとらない各種情報も整理して提供する必要がある。また、自館が所蔵しない博物資料や古文書などにつ

いても、所蔵場所やアクセスの手段を講じておく意義がある。特に、地域にある類縁機関とは連絡をとり、ときに連携して活動していくことが望ましい。

全市的なことに関しては中央館、各地区に関しては地区館が中心になる。

■　特別文庫（現在、中央館にある）

山室文庫	山室静は、文芸評論家、翻訳家。7 歳から旧制中学校を佐久市岩村田で過ごし、地元の野沢高等女学校の教師をした。生前から寄贈を受けた。著書、所蔵本（文芸書、詩集、児童書その他）など 9,574 冊。
相馬文庫	相馬遷子（そうま　せんし）は、佐久市出身の俳人、医師。「馬酔木」同人。相馬氏が所蔵していた個人句集や俳句・俳諧の書籍等 991 冊が寄贈された。
原野文庫	図書館入口に航空図書室の看板を掲げている。原野宣喜氏の寄贈のよる航空関係資料多数。雑誌、図書等 12,935 冊。飛行機模型もあり。
井出孫六資料	現在整理中。臼田出身の直木賞作家井出孫六の原稿や、執筆時に使用した資料がある。 ※　孫六氏は臼田出身で臼田に関係が深いことから、臼田図書館で所蔵することを検討している。ただし、図書館の床面積が限られているので展示は難しい。

(8)　デジタルとのハイブリッド化計画

■　地域資料のデジタル化の意義

一般書籍のデジタル化が今後飛躍的に進むか否かは出版界の動向もあり不透明な要素がある。しかし、地域資料に関してはハイブリッド化を視野にいれながら収集・保存・提供していくことが妥当だろう。

特に、著作権に抵触しない希少な地域資料については、他機関の所属調査を行ったうえで、デジタルアーカイブ化を進めていくことが望まれる。

■　現行の資料のデジタル化について

2023 年度は、明治末から昭和 16 年まで発行された「信濃佐久新聞」のデジタル化を行っている。前年度にデジタル化した分を合わせて、公開する予定である。

今後の課題として、著作権の確認、公開のためのプラットフォームの選択、広めるための活動があげられる。

(9) 文化・ビジネス・生活の情報発信、コミュニティ活動の中心

広報も含めて情報発信が弱い。発信型の情報サービスをはじめていく必要がある。

(10) 地域内の図書館類似施設、公民館等社会教育施設、学校等との連携

■　社会教育施設

社会教育施設の館長間においては連携の必要性の認識は徐々に高まっている。

2023 年度は、図書館、公民館、美術館の館長の話し合いにより、3 館連携の取り組みを行った。子ども公民館（親子が 3 館を訪問して学ぶ)、図書館スマホ講座、美術館のミニ講座への参加などである。

組織的、継続的な連携については、今後の課題である。

必要なときに互いに気軽に連携を持ちかけられるようにするには、職員間の日ごろのコミュニケーションも重要である。

■　学校等

学校との連携は、少しずつはじめている。

2023 年度は市内の小中学校の学校司書との共同研修を 3 回計画した。初回は、中央館と地区館の司書 6 名が参加、本館から「デジとしょ信州」の使い方について説明した。また、地区ごとに分かれて、学校図書館の困りごとを中心に意見交換をした。地区館の司書とその地区の小中学校の学校司書の面識ができたことから、公共図書館でのポップの展示など、話が進みやすくなってきている。

本格的な学校図書館支援は、今後の課題だが、学校図書館の担当者との交流を通して少しずつ取り組めるところからはじめていきたい。

なお、「デジとしょ信州」の説明は、司書教諭や他の先生方にも聞いてほしい、という声が聞かれた。学校教育課への連絡、働きかけ等も必要になるだろう。

■　その他

費用がかかるので容易なことではないが、美術館、博物館等の所蔵資料の横断検索システム、佐久市のデジタル資料の共通のプラットフォーム形成が望まれる。

（11）デジタル・オンライン対応の中心
情報リテラシーや情報処理のスキルを身近に身につける環境
経済環境によらず最先端の情報環境に触れたり学んだりできる役割

今後、社会の ICT 化が進んで資料や情報のデジタル化が促進されると、入手方法やアクセス手段もスキルがないと利用できなくなる。

図書館としてもデジタルディバイドの解消の一助に加わる必要がある。

また、情報リテラシーの涵養（かんよう）についても関与する必要がある。

ささやかな試みではあるが、今年度、公民館との連携で図書館スマホ講座を計画した。今年度は、各館 1 回ずつ全 5 回の予定だが、今後は回数を多くして継続的に実施していきたい。

(12)　場所、居心地の良さ、さまざまな観点でのバリアフリー
「わざわざ出掛けるリアルな場」としての魅力。図書、ネット検索、AI の情報整理では得られない、人を介したリアルな情報や手触り感のある情報が集まる場所、そうした情報を発見したり発信したりする場

令和 4（2022）年度に実施した市民アンケートでは、飲食等の場、市民交流の場、学習・趣味等の発表の場、といった従来の図書館にはない「場としての図書館」が求められている。

また、同じく令和 4（2022）年度実施した「佐久市中央図書館建替再整備ワークショップ」では、「みんなの居場所楽しめる図書館」、「バリアフリーでゆったりくつろげるスペース」、「利用者同士の交流ができる」など場所についての要望も出された。

資料利用だけに限定されない、居心地のよい、「場としての図書館」は、デジタル化が進んで来館しなくても用が足りる時代になれば、より強く求められるものになるだろう。

(13) 図書館同士の連携

■　近隣市町との関係

佐久圏域では、佐久市が中心市となり、近隣の市町村（小諸市、東御市、北佐久郡、南佐久郡）と連携して「佐久地域定住自立圏」を形成している。取り組みは、平成 24（2012）年度からはじめており、現在は「第三次佐久地域定住自立圏共生ビジョン」（令和 4 年～令和 8 年）に基づき事業が行われている。

社会教育に関する取り決めには、「文化・スポーツ施設等相互活用促進事業」がある。概要は、「関係市町村の文化・スポーツ施設に関する情報を集約し、ホームページ等により情報発信するほか、施設の相互活用方法について検討する」と記されている。それ以外に特に目立った活動はない。

［参考］県内飯田市の場合

下伊那地域では、飯田市が「南信州定住自立圏共生ビジョン」を策定、この一環として図書館ネットワークシステムを構築・運用している。

■　近隣の図書館同士、図書館職員同士の交流

現在、東信地域や佐久・南北南佐久地域において、図書館の公的な活動はほとんどない。

組織としては、長野県図書館協会佐久支部があり、年数回の会合はあるが、主として学校図書館が中心になっている。

近隣の図書館同士、職員同士の交流は意義あることなので、公的なものが難しいのであれば、私的な自主的な学習会、交流会を組織するのがよいと思われる。

2　地区館の役割（中央館と地区館との関係をどのように考えるか）

ご意見	本館の対応予定
市内図書館ネットワークシステムや、図書館物流ネットワーク等の基盤整備	現在のシステムの在り方を検証して、よりよいシステムや物流の方法について検討したい。
セーフティネットとしての役割（地域館・図書館類似施設が所蔵する資料も含めた貴重な資料の保全）	地域資料については、特にその役割が重要になると考えられる。
中央館と地域間での情報格差をできるだけ小さくするための、中央館での活動が見える「窓」のような仕組みが必要	情報格差の解消のために何ができるか。仕組みを考えたい。
特色がわかりにくく、住民にとって「中央館である」という意識は薄いのではないか	中央館、地区館の特色のあり方について考えたい。
中央という名称にこだわらない。若い人が親しみやすい愛称をつけるとよい	検討したい。

3　現在の佐久市立図書館の課題

ご指摘されたことを活かして今後の図書館運営・図書館活動を行いたい。

4　今後必要な分析

今後必要な分析	本館の対応予定
遠方からでも中央館に行ってみよう、利用して見ようと思ってもらえるしかけ	今後の課題
ヘビーユーザーが中央館を利用する理由	利用者アンケートを実施予定
若い世代のニーズの調査、若者の利用が多い図書館の工夫	今後の課題
図書館運営を担う主体者の役割	職員、利用者、ボランティアとの会話をはじめる
佐久平周辺などの「新住民」の意識調査	今後の課題
人流データの分析、公的交通機関の状況、自家用車の所持台数	下記および別紙資料

■　交通事情と図書館サービス

◆　人流データの分析、公的交通機関の状況、自家用車の所持状況等

交通関係の資料は、佐久市が策定した「佐久市地域公共交通計画」（令和 5 年 3 月）に掲載されている。①人流データは「通勤・通学流動」の図《ｐ14-15》（別紙資料ｐ7.8）、②公的機関の状況は「公共交通の現状の図」《ｐ21-25》（別紙資料ｐ10-14）、③自家用車の所持状況は、「自動車保有台数」《ｐ20》（別紙資料ｐ9）が参考になる（以上、別紙資料に掲載）。

◆　公共交通の図書館へのアクセス

図書館へのアクセスを心配される声があったので、現在の佐久市の交通事情と図書館へのアクセスの課題について述べる。

佐久市内の公共交通は、鉄道（JR 小海線）と路線バスとデマンド交通である。鉄道は、市のほぼ中央を通っており、高校生の通学時間帯は 1 時間に 1 本以上の本数がある。その他の時間帯は、本数が少なくなる。

路線バスは、鉄道を利用できない地域を運行している。通学か通院する人を対象にしたもので、早朝か夕方に 1 日 2 便～9 便ある。土日の運行はない。

デマンド交通は、「デマンドワゴンさくっと」という名の乗り合いバスである。市内各地区や市街地を走る。佐久市の住民で登録した人が利用できる。乗車する場合、1 週間前から

60 分前までに予約する。

このような交通事情では、公共交通機関を使って自在に好きなところに行くということができない。どこに行くにも自家用車を使うことが前提となる。

◆　対策

現在の中央図書館は、JR 小海線の北中込から 800m の距離にあり、比較的便利な場所にある。しかし、小海線から離れた地域に住む人には自家用車がなければ来館は困難だろう。

新中央図書館の建設場所は未定だが、いずれの場所に決まっても同様の課題は生じる。これに対してどのような対策が立てられるだろうか。

交通に関わる対策として

○　駐車場を広くする。

○　路線バスの運行ルートの見直し等を行う。

図書館サービスとして

○　来館したくなるような図書館にする。

○　非来館型のサービスを充実させる。

○　宅配をする。

5　その他

令和５年度第 1 回中央図書館建替再整備検討委員会アンケート中、小木田委員ご質問（２点）の回答

Ｑ１　図書館で、指定管理者制度の導入は検討されているのでしょうか？

Ａ１　毎年実施している「図書館管理運営事業の事務事業評価」中、事業の分析の「官民連携の可能性」において、「市が実施する必要がある」（指定管理者制度も含む民間への委託による実施が可能ではない）としています。

Ｑ２　来館者数・本の回転率の向上などの成果主義的目標は求められていないのでしょうか？

Ａ２　成果主義的目標ではありませんが、図書館利用を活発にするため、以下の目標を設定しています。

<table>
<tr><th>項目</th><th>（設定年）
目標値</th><th>R4 実績値</th><th>計画等</th><th>設定理由等</th></tr>
<tr><td>市立図書館の
入館者数</td><td>（R8）
300,000 人</td><td>234,360 人</td><td rowspan="2">佐久市教育振興基本計画
（令和 5 年 3 月策定）</td><td rowspan="2">発達段階・ライフスタイルに応じた読書活動推進のための数値目標の成果指標</td></tr>
<tr><td>読書が好きな
小中学生の割合
*1</td><td>（R8）
小学生
80％
中学生
80％</td><td>小学生
81.6％
中学生
72.3％</td></tr>
<tr><td>おはなし会の
参加人数</td><td>（R6）
2,160 人</td><td>863 人</td><td rowspan="3">佐久市子ども読書活動推進計画
（令和 2 年 8 月策定）</td><td>乳幼児期に多くの本と接することが生涯の読書活動の形成につながることから、読書に親しむ乳幼児の増加を図る</td></tr>
<tr><td>市内在住の
中学生以下の
読書通帳交付件数</td><td>（R6）
970 冊</td><td>958 冊</td><td>読書通帳を交付することが、自ら読書に興味を持つことや、読書への達成感の向上につながり、読書に親しむ子どもの増加が図られる</td></tr>
<tr><td>市立図書館と
学校司書連携研修
の年間回数</td><td>（R6）
4 回</td><td>3 回</td><td>学校との連携により発達段階においての読書活動を推進する</td></tr>
<tr><td>蔵書冊数</td><td>（R5）
457,000 冊</td><td>459,080 冊</td><td rowspan="2">令和 5 年度事務事業評価
（評価対象:令和 4 年度）</td><td rowspan="2">市民ニーズに対応した取組により、多くの市民が図書館を快適に利用する</td></tr>
<tr><td>図書等の貸出冊数</td><td>（R5）
590,000 冊</td><td>586,306 冊</td></tr>
</table>

*1 全国学力・学習状況調査の児童質問紙における、「読書は好きですか」の問いに、「好き」「どちらかといえば好き」と回答した児童生徒（小学校 6 年生、中学校 3 年生対象）